

II・遊びと発達

# 〈子どもも—養育者〉関係の 見立てと遊び

## 初回面接での見立て

ある子ども相談センターでの診察場面で

数年前、ある子ども相談センターから事例の診察と助言を求められて、出かけて行った時のことである。診察室には、子どもの相手をする保育士と診察介助役の看護師が同席していた。親子が入室すると早速、保育士は診察室の一角に設けられた遊び場に、子どもを誘導して相手をし始めた。子どもへのサービース精神旺盛な保育士で、子どもを遊びに誘おうと積極的にかかわっていた。

初めのうちは筆者も我慢して母親の話を聞いていたが、まもなく辛抱できなくなってきた。

## 小林隆児

大正大学大学院人間学研究科

保育士にしばらく子どもの相手をするのをやめて離れているようにお願いした。保育士は日頃の医師の求めに沿って、母親面接の間、子どもの相手をしていたのである。それが自分の役割だと思ひ、熱心に取り組んでいたから、筆者の指示には驚くとともに、おそらくは、自分の役割を否定されたような気分になったであろうことは容易に想像できた。

保育士の気持ちを考慮すれば、筆者が我慢すればよかったのだが、初回面接での見立てという真剣勝負の場で、細心の注意を払って観察しなければならぬ親子のかかわり合いの機微が、保育士の介在によって捉えられなくなってしまう。そのため、止むに止まらず席を外すようお願いしたのである。

家族の中の子ともという視点

子どものこころの臨床においては、少なくとも家族全体を視野に入れながら実践しなければならぬことは、改めて言うまでもない。家族の中で子どもという視点を通して理解することが常に求められる。よってほとんどの事例において、子どもに対して一対一の遊戯治療や面接を行うことがあるとしても、それと同時に家族に対する面接が不可欠である。

それは、時と場合によって、併行面接、あるいは同席面接のかたちをとる。面接形態如何にかかわらず、子どもとの面接場面で展開している事柄と、母親面接で語られる事柄がどのような関係にあるのか、それを捉える視点をもたなければ、家族の中の子ともという視点での理解は深まらない。

## 通常の初回面接の流れ

実際の初回（に限ったことではないが）面接場面では、医師は主に親の話を聞き、そばで（あるいは別室で）他のスタッフが子どもの相手をしていることが多いのではなからうか。相談センターの保育士がとった行動はそうした日常の診察場面の様子を端的に示したものといつてよいだろう。それにはさまざまな現実的制約が関係していると思う。診断

と治療を求めてやってくる家族への対応は、どうしても医師が担わざるをえないだろうし、多忙な医療現場では、子どもへの治療に医師が十分な時間を割くことは容易でないからである。

ただ忘れてはならないのは、親からの話を中心にして子どもの発達経過の概略を把握し、そこにかがわれる子どものさまざまな病理像を、子どもの診察を通して確認するという手順を踏むという一般的な初診時の流れの中で、そこに「家族の中の子ども」という視点がどのように反映されているかを検討する必要があるということである。

筆者がここで取り上げてみたいのは、養育者から話を聞くことと、実際の子どもと養育者との関わり合いの機微を観察していくことを、面接者はどのように関連づけたいかということである。

### 事例を通して考える・1

本誌一〇号（小林、二〇〇八）で筆者が取り上げた事例（A男、六歳）について、その後、直接母子面接をもつ機会があった。子どもの見立てを求められていることである。

ここでは事例の詳細は省くが、乳幼児期から過敏な子どもで、母親は養育に随分と苦労

していた。ことばそのものに目立った遅れはなかったが、身のこなしがぎこちない、視線が合いにくく、なんとなくコミュニケーションがしつくりこないという感じをずっともち続けていたというのである。

#### 母親面接で感じたこと

筆者が面接をした時、A男は部屋の半分ほど使って担当セラピストと遊び、筆者は母親面接を残りの空間を使って行うことになった。母親はきちんと対面して、こちらの質問に丁寧なことば使いで微に入り細を穿って話をしていった。あまりの緻密すぎる話に、筆者は話に分け入ることが容易ではないな、と感じていた。

A男の幼い時からの話を聞き始めたが、母親の話は次第に熱のこもったものになっていった。聞いてもらいたいという思いから、話に熱がこもるのは自然の成り行きではあるが、筆者がその時気になったのは、どうも母親には懸命に自分を守ろうと自己弁護しているともいえるような、気の張りつめた息苦しさを感じ取ったからである。

その前にA男のこれまでの様子を聞いていく中で、周囲に対してびくびくしながら生活し、母親を頼りにしてきたのではないかと感じたので、そのことを母親に投げかけてみて

いた。子どもの気持ちそのものについては期待した応答はなかったが、子どもの就学相談の時、学校側から冷たくあしらわれて傷ついた体験があることが語られ始めた。

以来、母親はあまり人に頼らず、自分に落ち度がないように、しっかりとしなければという思いになったこともわかった。子どもの気持ちに思いを寄せる余裕が、今の母親にはないのであるか、と気になった。

母親は身を乗り出さんがばかりにして、目を見開いて、自分の思いを一所懸命に語り続けた。筆者は母親のあまりに熱い思いに圧倒され、飲み込まれるような不安さを感じていた。母親のこのような懸命さは子育てにも強く反映していた。A男に対して一挙手一投足にわたって落ち度のないように、つまりは他人様に迷惑がかからないようにと声かけをしていたのである。

A男は、一見すると、セラピストに対してサーピス精神旺盛に語りかけながら楽しそうに遊んでいたが、実はずっとこちらの面接の様子が気になり、アンテナを張りめぐらし、遊びそのものに気持ちが集中していないのが見て取れていた。

#### 遊びの中で（子ども―養育者）関係が変わる

このように母子ともども痛々しいほどに懸

命に生きていたのだが、その息苦しさはどこからくるのか、そのことを解き明かしていくことが、本事例の関係支援を考えた時、大切なポイントではないかと想像していた。そこでこの面接で、なんとか少しでもそのところを和らげることはできないかと考え、母親のこれまでの生き方について肯定的に取り上げ、かつ大変な思いを汲み取りながら、「これまでお母さんは遊びのないハンドルで車を懸命になって運転してこられたように感じますね」と投げかけてみた。母親はまもなく涙ぐみ始め、肩の力が少し抜けたように感じた。

その時であった。それまで母親から離れてセラピストと遊んでいたA男が、急にわれわれが面接している場にボールをはずみで放り投げたのである。われわれは驚き、母親はすぐに注意したが、筆者は注意喚起行動であることをすぐに察知し、A男の気持ちを受け止め、おどけたようにして大袈裟に驚いて見せた。すると、母親の傍に寄ってきてまとわりつき始めたのである。

## 事例を通して考える・2

もうすぐ三歳になる男児（B男）である。母親の心配はことばの遅れと、視線が合いに

くく、関係がしつくりこないということであった。他の医療機関にいけば、おそらく広汎性発達障害と診断されるような事例である。

### 面接での様子

母子および祖母同席で初回面接を実施した。母親はすぐに話を聞いてもらいたそうにしていたが、まず筆者は少しの間、B男の相手をして遊んでみた。

B男はこちらの様子をうかがうように、ちらちらと視線を送りながら、ボールを手にとってバスケットボールのかごに盛んに投げ入れれていた。うまく入らなくても投げやりになることなく、何度も挑戦していた。今度はバットを手にとつてボールを打ちたそうにした。筆者がボールを投げてやると、すぐに応じ懸命になって打ち始めた。空振りになつても何度も何度もバットを振り続け、うまく打てた時には控えめではあったが、両足をばたつかせて、喜びを全身で表に現していた。

筆者はB男の反応に手ごたえを感じながら、今度は母親にB男の相手をするようにバトンタッチをし、母親とB男の遊びに付き合いながらその様子を見ていた。母親は最初は一所懸命に相手をして遊んでいたが、子どもの心配事を聞いてもらいたくて、次第に子どもよりも筆者のほうに注意が向き始めた。

筆者は祖母と机を挟んで向かい合つて座り、母子の様子をときおり眺めながら祖母と話していた。B男は母親と遊んでいたが、ボールを投げた拍子に、面接机の上にあったコップに当たつて少しお茶がこぼれた。B男は「しまった!」とでもいうような困惑した表情を浮かべ、母親の背中にしがみついた。いかにも悪いことをしたという思いが全身の動きに感じ取れた。母親はその時のB男の反応を見て、こんな姿を見たことはないとうれしさと驚きのまじつた声をあげた。まもなくB男は部屋を出て行った。

### 遊びの中で(子ども―養育者)関係が変わる

その後、母親面接に移つて、母親が心配してきたことが語られ始めた。筆者は「これまでB男の子育てで心掛けてきたことは何ですか」と尋ねると、「振り返ってみると、何もないかもしれない。上の姉や兄の行事と一緒に連れていくことが多く、家にいる時には一人で遊んでいるので、それをいいことにして家事に専念していることが多い」と振り返るのだった。

そこで筆者は、「そうした親子関係が今の子どもの様子と何か関連があると思いませんか」と尋ねた。すると母親はいろいろなことが一気に思い起こされたようで、次々に語り

始めた。筆者はゆっくりゆっくりと一語一語噛みしめるようにして、ことばをつなぐように心掛けていたが、母親はこちらの一言に対して、実に多くのことを返してくるのであった。その時、筆者は、母親のせつちで先取りの話し方に、こちらの気持ちも萎えてしまいそうな感覚に襲われた。そこで筆者は、そのことを取り上げた。すると母親は、顔を少し紅潮させながら思い当たることがあると一気呵成に語り始めた。

自分は子どもに対してなぜか「待てない」ところがある。自分の望むタイミングで子どもに行動してほしいと思ってしまう、つい子どもに対して怒ってしまうことも多いというのである。たとえば、上の娘（長女、八歳）はデリケートな子で、あまり話さないが、いろいろと一人で考えている。本を読むのが好きで、大人びたところがある。能力は高いと思うのに、学校から帰ってもすぐに宿題をやらない。やらなくてはいけないとわかっているのに、やろうとしない。今やればすぐできると思うのに。夜になって時間がなくなっからやろうとする。そんな姿を見ているといらいらする。二番目の息子（兄、四歳）は姉と弟の間に入って気を使っている。母親からみるととてできた子で……。

このように筆者が母親との面接の中で感じ

たことを取り上げたことをきっかけにして、母親は三人の子どもとの関係について、次々に思い起こして語るようになった。

まもなくB男がセラピストと一緒に部屋に戻ってきた。すると一目散に母親のところへ走って行き、首に強く抱きついたのである。B男は心から甘えているのがひしひしと感じられたが、母親の気持ちを尋ねると、素直に「うれい」と答えるのだった。しばらく母親の膝の上でじゃれていたが、満足したのか、ふたたびセラピストと遊び始めた。

## 二回目の面接

一週間後。その後の家庭での様子を尋ねると、夫が「今日のお母さんは違うね、ずいぶんやさしいね」と驚きの声をあげたという。B男もずいぶんと甘えるようになって、一人でビデオを見せても、すぐに母親の手を引いて一緒に見ようと引つ張り込んで、母親の膝の上ののって見るようになったという。

## 母子の遊びで気づいたこと

面接の開始後しばらくの間、母親にB男と一緒に遊ぼうと促し、筆者も付き合った。B男は小さなスポンジボールを二個、手に持っていた。それを見て母親はすぐにそのボールとセットになっているゲートボール用のステ

ィックを取り出し、B男に手渡しして使うように誘った。B男は戸惑っていたが、母親はなんとか使えるようにと手を携えて教えていた。するとB男はスティックを手に持って小さなトランポリンの下を覗きながら、まるでモップがけするようにして出し入れし始めたのである。

前回とは異なった年長児向けの遊戯室であったため、先週使った部屋にB男を招き入れて、扱いたい遊具を選ぶように誘った。ボールを選んだが、それは先週バッティングの時に用いたものだった。筆者がためしに差し出したバランスホールを手にとると、元あったところに自分から片づけるのだった。すぐに元の部屋に戻ったが、筆者はバットも欲しいだろうと思い、部屋の片隅にさりげなく置いてみた。すると目ざとく見つけてバッティングを始めた。母親がボールを投げてやり、B男はバットで打ってはうまく当たるとうれしそうに反応していた。周囲の大人たちも拍手をし、雰囲気は盛り上りを見せていた。

けっこう楽しそうにしていたが、次第に飽きてきたのであろうか、バットの持ち方が変わったのに筆者は気づいた。それはまるでバットが刀に変わったように見えた。しかし、母親はそれに気づかず、なんとか打たせようとして懸命に相手をし、B男がその気になるよう

にさかんに仕向けるのである。そこで筆者はそばにあったゲートボール用のスティックを手を取ってチャンバラごっこを始めた。するとB男はバットを刀にして応じ始めた。遊びにどんどん熱が入り、懸命になって切りつけ始めたので、筆者はおどけるようにして怖がって逃げた。するとB男は追いかけてまで、チャンバラごっこを続けるのだった。

### 遊びの中でみえてくる母親の对人的構え

まもなくB男の相手を同席していたセラピストに頼み、筆者は母親との面接を開始した。そこで取り上げたのが、遊びがチャンバラごっこに変わった場面である。

母親はB男の変化に気づかなかったというが、以前からチャンバラごっこだけは、なぜか母親に要求してよくやっていたというのである。そこで筆者は、母親が頭の中でこうと思ったらそれをやり続けるところがあることを取り上げた。つまりは玩具を扱う際に、それがバットであれば野球を、ゲートボールのスティックであれば、ゲートボールをしようという思いに駆られやすいことについてである。母親はすぐに頷き、涙ながらに次のようなことを語り始めた。

昔から固定観念が強いと他人に言われていた。「しなくては(いけない)」という思い

がいつも強いという。そばで聞いていた祖母は、この子は理想をもってそれに向かっているが、どうも理想が高すぎる、きちんとしたくはという思いが強すぎる、というのである。母親は次第に内省的になった。

自分のもっていないものを他人がもっていると、うらやましくなる。その人の良いところばかりが目につくようになり、自分の嫌なところ、苦手なところを人に見られたくないという気持ちになる。だから人づきあいも深入りしたくない。深入りすると相手のいろいろなところが見えてくるし、自分も見られるから怖い。人づきあいは必要に迫られれば、そのところだけ付き合うようにしているというのであった。

筆者は黙って頷きながら聞いていたが、母親の話にはこれ以上深入りしないことにして、筆者は子どもと遊んでいた時に感じたことを説明した。B男がやりたそうにしていることに付き合っていくと、B男は意欲を示すし、こちらが少し誘ってみると、けっこうついてきて、真似して自分からやるうとする。気持ちもわかりやすく表現しているので、付き合いやすい。自分で、自分で自己主張するところも見られると、肯定的に印象を述べた。すると母親は不思議そうな顔つきで聞いていた。それまで母親はこの子が自分の思い

通りにやりたがり、一緒に遊ぶのは難しいと感じていたからである。

### 〈子ども—養育者—関係の 見立てと遊び

筆者が「関係性」の重要性に着目してきたのは、けっして〈子ども—養育者—関係を客観的に観察評価し、関係の発達促進を試みようとしたからではない。相手のこのころのありようを理解する際には、自分のこのころの動きを反省的に感じ取ることが大切であると思われるからである。

先の面接場面を再度取り上げながら具体的に考えてみよう。どちらの事例でも、筆者が母親との面接の中でいつも念頭に置いていたことは、子どもが母親に対して、なぜ回避的行動をとりやすいのか、その理由がどこにあるのか。両者のあいだにどのような気持ちの動きが生起し、回避的行動へとつながっていくのか、ということである。それを推測する手がかりは筆者自身が母親との面接で感じたことの中にある。なぜかといえば、〈子ども—養育者—関係の中で生起する気持ちの動きと同質のものが、養育者と筆者とのあいだにも同じように生起すると思えられるからである。

子どもが母親に対して関係欲求(甘え)を抱きつつも回避的にならざるをえないのは、そこになんらかの近づきがたい気持ちがある。それは、養育者が子どもに対してかかわる際に派生する刺激のもつ力動感 *vitality affects* である。具体的には、前者の事例で筆者が、「母親の話に分け入ることが容易ではないな」と感じたことであり、後者で「母親のせつこちで先取りの話し方に、こちらの気持ちが萎えてしまいそうな感覚に襲われた」ことである。

ここで大切なことは、養育者が何を語ったかというその内容ではなく、養育者の語りか筆者の身体にどのような響いたか、その力動感の質的内容である。このことを子ども自身も母親とのあいだで感じ取っていたがために、回避的にならざるをえなかったのではないかと思われるのである。

さらに忘れてならないのは、このことが母親自身にもいえることである。すなわち、養育者も子どもの気持ちに触れ合うような接近が困難であったがために、どうしても子どもの遊びで先入観に囚われやすく、子どもの今の気持ちを感じ取ることを困難にしていたともいえるのである。

その後の面接過程を振り返ると、このよう

な筆者の推測もあながち的外れではなかったことが見てとれる。実際の面接の中でそのことを母親に取り上げたところ、母親はみずからの気持ちの動きに気づくことよって、それまでの対人的構え、つまりはある種の近寄りたさが和らいでいっている。

そのことが、面接の中で子どもの養育者に対して向けられた態度の、劇的な変化として如実に示されている。養育者自身のみずからの気持ちのありように注意を注ぐことができることよって、それまでの対人的構えが緩み、そのことが〈子ども—養育者〉関係の変容へとつながっている。われわれが教えられるのは、いかに子どもたちがこうした場の雰囲気の変化、すなわち力動感を鋭敏に感じ取って動いているかということである。

#### おわりに

常日頃、筆者は面接で養育者と自分のあいだに流れている気持ちのどのようなものか、それはなぜ起こるのか、そんなことにさりげなく注意と関心を注ぎながら、養育者の話に耳を傾けるように心がけている。すると次第に、養育者の語る話の内容、つまりはことばの字義にはあまり気を取られないですむようになった。面接の中で子どもと養育者の関係を実際に動かしているのは、字面のレベルで

はなく、こうしたところの動きであることを最近とみに実感するようになった。

養育者とわれわれとのあいだに流れる情動(気持ち)の動きが、子どもと養育者とのあいだにも流れていること、ここに〈子ども—養育者〉関係を見立てる際のもっとも大切なポイントがある。そんなことを痛感している今日この頃である。

#### 〔文献〕

小林隆児「自閉症のこころの問題にせまる」『そだちの科学』一一号、二一九頁、二〇〇八年